

〔農場紹介〕

## 有限会社 道南アグロ

代表取締役社長 日 浅 文 男

当社は平成元年より、夕張農場と栗山農場の2農場で120頭の分離一貫を行ってきたが、作業性や施設および経費の問題により、平成4年に栗山農場に集約した。

平成6年には、閉鎖養豚場の遊休施設を新たなSPF農場として活用できないか検討を開始した。既存豚舎の活用の可能性、地域・行政との環境問題を主体としたコンセンサス、近隣にと畜場があるため、防疫および農場の衛生対策などを検討し、一定の整理がついたため、平成7年6月に農業生産法人道南アグロを設立した。

SPF豚を飼育できる設備に改修し、さらに防疫体制がとれる農場へと改造を行い、平成7年11月より種豚（ハイコープSPF豚）の導入を開始した。平成8年4月から分娩を開始し、同年9月末から肉豚出荷がスタート。平成8年12月にはSPF豚協会の認定を得た。

農場の場所は北海道芽部郡森町、大沼国定公園から車で15分ぐらいの所に農場はあり、常時稼働母豚数は380頭。周囲は酪農を中心とした畜産地帯で、畜産の臭いに対しては比較的寛容であるが、公害対策を十分考慮した設備を設置した。

以前はコンベ豚を飼育していたものの、休業期間が1年以上あり、さらに清掃・消毒を特に十分に行った結果、新設農場と同様のSPF豚の効果が現れ、発育が非常によくなった。しかし、厚脂での格落ちのため上物率は53%となっており、対策として雌雄別飼育や給餌器等の検討を行い、上

物率の向上を図っている。

豚舎施設は種豚舎の3棟、交配舎1棟、分娩舎3棟、離乳子豚舎3棟、肥育舎4棟で、このうち新設が2棟、全面改築施設が4棟となっている。その他、北海道の場合オーエスキー病フリーのため、8週間の検疫が必要であり、農場から離れた場所に導入隔離舎1棟を設けている。新設の離乳子豚舎1棟と肥育舎1棟については、カーテン式で全面プラスチックノコとし、サイクルファンを採用した。

分娩舎については、以前の天井を全部取り払い、ガルバニウムと断熱材を旧屋根の上より取り付け、高床式の分娩ケージを採用した。交配舎は片側に雄、もう片方に雌豚を収容し、建物と建物の上に運動場を設け、離乳後に一度その場所で放牧し、発情促進と足の強化をしている。

肥育舎は4棟のうち3棟が既存のはね上げ式豚舎で、3棟で1,200頭を収容している。1豚房当たり10頭収容とし、1頭当たり1.0m<sup>2</sup>を基準にしている。

給餌器はウェットフィーダーを採用している。そこから出荷台まで連絡通路でつながっている。と畜場は当農場（SPF豚）専用処理となっているのが特徴である。このと畜場は、雪印グループの（株）道南雪印食肉で、牛をメインラインと一部雪印の預託豚をと畜処理していたが、その豚部門を廃止し、すべてSPF豚専用ラインに切り替えるという方針を打ち出した。これを受け、と畜場の

処理能力と当農場からの供給がマッチすることから、当農場からの出荷豚の集荷、と畜解体を全量同社に実施してもらうことになった。

販売先はホクレンと雪印食品である。当と畜場は当農場より500m程度の距離にあり、肉豚の輸送が非常に容易であるというメリットもある。

当農場の特徴をまとめると、まずは旧豚舎を手直ししながらSPF農場としてスタートしている点。2点目は、と畜場との連携で処理段階におけるSPF専用ライン化が実現し、さらに安全でクリーンな豚肉の供給が可能になっていること。3点目としては、農場スタッフが全員素人だということを考慮すれば、今後はさらに成績を向上させられる期待がもてる。

生産成績 (別表1)

生産成績：平成8年4月～平成9年3月	
稼働母豚月末頭数	369頭
稼働雄豚月末頭数	15頭
年間分娩回数	2.23回
総産子数 腹	10.58頭
離乳子数 腹	9.44頭
離乳率	96.0%
平均出荷体重	112kg
平均肥育日数	172日
上物率	53%

施設配置図 (別表2)

